

古典の口語訳について

— 源氏物語桐壺 —

能 勢 佐 十 郎

世界の古典とも云うべき源氏物語は紫式部の生涯をかけた物語である。これの研究の基礎作業は故池田博士の偉業。「源氏物語の大成」によって一段落はついたのであるが、これを本としての諸研究は残されている問題が多いようである。その一である口語訳について少し考えてみたいと思う。

桐壺の一節

野分だちて、俄に腐寒き夕暮の程、常より思し出づる事多くて、
靱負の命婦といふを、遣はず。夕月夜のをかしき程に、
出し立てさせ給ふて、やがてながめおはします。

斯様の折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心殊なる物の音を掻き鳴らしはかなく聞え出づる言の葉も人よりは異なりし気はひ容貌の、面影につと添ひて思さるゝにも、闇の現には猶劣りけり。(桐壺) 右の文の(一)「遣はず」(二)「出し立て」の箇所について口語訳を考えようと思うのであるが、明治からの重な解釈書を見ると、

- (1) 遣はし給ふ (新釈源氏物語 沼波武夫訳)
- (2) お遣はしになった。(源氏物語講話 島月久基訳)

- (3) お遣はし遊ばされた。(新釈源氏物語 五十嵐力)
- (4) 使に出す。(源氏物語講義 阿部秋生)

以上の如くである。(1)は明治四十年頃の訳としては致し方ないであろう。(2)はこれで正しい訳と云えよう。(3)流石、五十嵐博士の畢生の仕事であるだけに適訳というべきである。(4)は阿部博士の訳であるが、啞然たるをえないのである。次に、

(二)の「出し立て給ふ」について考究してみよう。源氏物語中の用例をみると、

- (1) 京へいたしたて給ふ(須磨四一四②)
- (2) 御つかひいたしたて給ふ(濤標四九三④)
- (3) あさんのいつきむすめいたしたてたらむ(少女六九五⑤)
- (4) わかきみをはましてめくみ給てんといいたしたてまつる(玉鬘七三一⑥)
- (5) このきみのひととなり宮つかへにいたしたて給はむ(常夏八四一⑩)
- (6) このきみのふところかみにとりませおしたゝみていたしたてた

まふを（紅梅一四五四②）

(7) たのもしく思ひ給へていたしたて侍りしとは（竹河一四九八）

(10)

(8) 又のことさらにそいたしたて給む（夢浮橋二〇六三③）（源氏物語大成による）の如く例は少いのであるが、

「いたしたて」に続く語を見ると、

給ふ（12568）
まつる（4）
いたしたて
侍り（7）

で「給ふ」が五回で一番多いのであるが、本文は「いたしたてさせ給ふ」とあって、「させ」が用いてある。この「させ」は尊敬の助動詞である事は常識であるが、この箇所は源氏物語中、唯一の例といわなければならない。従って、式部の用筆に就いて苦心している所で熟読すべきである。

「いたしたて」は熟語であるが、流暢を心とする式部の文体に於て、何故かゝる漢語をわざ／＼用いているのであるか。私考するに帝は時時禁裡には木の葉散り果て、折からの野分の訪れ、夕月夜等悲しい感傷をそよりたてる宵、自然の景感の推移に対して小さく、はかない人間の悲しい運命を調和させようと努力されるが、自然が美しく慈愛深く人間に愛を与えれば与える程人の心は干々に乱れてくる、其の心の動揺とおのゝきをおさえるべく、命婦をおつかわしになるのである。この心境を「いたしたてさせ給ふ」としたのであるうと思ふのは如何であろうか。

古典の口訳に地方語を傍証に出すのは警戒すべき事であるが、私の地方（丹波）でも、丁寧な云い方をすると、婦人などが、

わざ／＼お使をたて、戴きましたのに風をひいていましたので失礼しました

などの対話を耳にするが、「たて」に「つかわす」意味のある事がこれでも了解できるのである。

さて、名著の口語訳はどうであろうか。

沼波、五十嵐博士等は意識されているので問題外とする。

(1) 出しておやりになつた。（島津、谷崎）

(2) 出しておやりになつて、（阿部）

(3) お遣わし遊ばされて、（評解源氏物語 玉上琢弥）

谷崎潤一郎は、島津博士のを参照されたのであろうし、阿部博士もこの轍をふまれたものと思われる。今でも、母が、子供に

犬が出たがつとるで、もう出しておやり

など使っているし、主語は「帝」でその続きとして、「出しておやり

になつて」と訳するのは源氏物語の本文に忠実と云えるであろうか。

敢て阿部博士にお尋ねしたいのであるが、(一)のところでは、「使出す」と訳され、又此処でかゝる口語訳をなさる事は、如何なるものであろう。

受験の為に、趣味の為に、源氏物語を読む若き学生など、とかく、肩書にほれる日本人のくせとして、東大教授、文学博士の名にみせられ、こゝを忠実に暗記するとしたら其の筆罪は少くないであらうし、又式部も地下で泣いているであらう。然し最近の

玉上氏の訳は私の意とするところで敬服の至である。

附記

高等学校での、古典の学習には必ず口語訳という作業が行われるのであるが、其の難事業である事を記そうとしたままで、阿部博士の如き立派な人をこき下して得意とするようなあさましい心でない事を附記すると同時に、博士の「源氏物語研究序説」には感服して恩恵を受けている事も記しておきたい。

（昭和四〇・二・一三記）

（前東舞鶴高校教諭）